

医療機関の連携を推進する コーディネーター役が第一の使命。

地域医療推進

地域医療における大学病院の役割

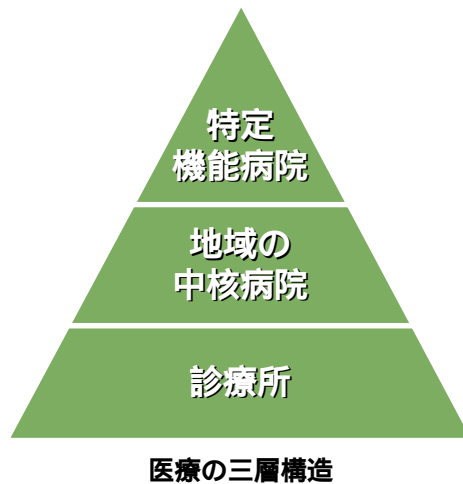
今までは大学という枠の中で医療を提供してきて、外との関係というのはあまり考えてこなかったような経緯があります。

例えば、開業医さんに紹介されたり、あるいは「後の治療をよろしくお願いします」と、開業医さんに返したりすることが、医療全体の地域という中で見た場合に、必ずしもうまく機能してこなかったわけです。それを是正するために、医学部附属病院と歯学部附属病院が統合するのを契機として、「地域保健医療推進部」という部署が誕生したわけです。

医療機関というのは、その規模から、お医者さんが1人でやられているような診療所、地域の中核病院、そして大学のような特定機能病院の3つに分けられます。一般的に、最初は診療所で診てもらい、そこで手に負えなければ地域の中核病院へ、それでも難しければ最先端技術を有する大学病院のようところで対応するというような段階を踏みます。

地域保健医療推進部の役割

遠いところから腹痛や風邪、あるいは虫歯でここまで来るのは大変ですし、せっかく診てもらっても地元の病院を紹介してあげるからと、紹介状を持たされて帰されたりすることもあります。また、特定機能病院では紹介状がないと高い初診料を払わなければいけません。あるいは、難しい病気の場合、治療が終ってもリハビリやいろいろなことが絡んでくると、入院の期間はどんどん長くなっていきます。入院が長くなると、別の患者さんが来て入院して治療が受



けられないというケースも出てきます。その場合、在宅療養を含めて最寄りの病院と連携して、手術の終わった患者さんの退院を支援する必要があります。すなわち、地域の中で、診療所と中核病院と大学病院との間で、患者さんを紹介してくるルートと、戻してやるルートを整備する「コーディネーター」役が、われわれに課された第一の使命だと思います。これまでは、個人対個人のレベルで行われてきた連携を、もっと全体の仕組みとして病院のシステムとしてやらなくてはいけないということです。

この部署は、平成15年の4月にできましたが、実際に動き出したのは8月でした。今、どうやってコーディネートしているのかということを探っているところです。まず、ニーズがどうかを探っています。

現在のところ専任スタッフは私と看護師1名のみですが、院内各部署の兼任スタッフにお手伝いいただいて組織作りをしているところです。患者さんの退院支援や社会復帰に際しては、経済的・社会的・心理的なサポートを行うことが大変重要ですか



鈴木一郎 助教授

ら、この面の専門職である医療ソーシャルワーカー（社会福祉士）の参画も是非実現させたいと考えています。

広報と相談の窓口として

この部署の機能の1つに、地域の医療機関や患者さんへの広報や相談ということもあり、広報については、大学病院には医療情報部という部署もありますので、そちらと協力していきたいと思っています。

よく他医療機関の先生から、「何々の得意な何々先生は何曜日だったら診療してくれるだろうか。紙ベースでもホームページでもいいから、ぜひ当番表みたいなものを出して下さい」と、要望を受けます。医療情報部の守備範囲なのかも知れませんが、地域連携という観点からいえばわれわれの重要な仕事の一部であり、協力して充実させていきたいと考えています。

今後の課題

地域の医療連携をすすめていくには、行政や医師会・歯科医師会といった団体との連携もとても重要です。こうした行政や関連諸団体とのネットワーク作りもどんどん発展させていきたいですね。

医療の現場というのはいろんな意味で効率化されていなくて、個々人でやっている場合が多いです。人がいっぱい動いて無駄が多いという根っこがあります。それはある部分はIT化などにより合理化・能率化しないとイケません。これは、医療事故防止という観点からも重要なところです。

目指すところは地域との連携ということでお話してきましたが、そのためには大学

の中の風通しをよくしていかなければいけないと思っています。病院内での内部的な連携というところから、まずはじめていかなければならないのかもしれないかもしれません。

（聞き手：石坂妙子、川瀬知之）



文字通り「地域保健医療推進部」の看板を背負って立つ鈴木先生